萬鐵五郎の宗教熱——青年期の日記に見る参禅の前夜

澤田　佳三

はじめに

萬鐵五郎（一八八五―一九二七）の一冊の日記帳［図1］が、萬鉄五郎記念美術館に残されている（註1）。当時十八歳だった彼が、一九〇四（明治三十七）年の一月一日から十月二十三日まで記入したものだが、空欄の日も多く合計して五十二日の日記となる。もう一か月継続していれば十九歳を迎えていたものの、そこに至らず投げ出してしまったものか。

岩手県の土沢（現花巻市東和町土沢）に生まれた鐵五郎は、家庭の事情で中学への進学を許されず、数年間の家庭学習を強いられてその後上京。一九〇三（明治三十六）年三月末にいよいよ私立神田中学校三年への編入学が許可される。土沢で生活をともにした従兄弟の萬昌一郎（一八八七―一九四三）も翌月には後を追って上京し、同校二年に編入学した。ところが同校が廃校することになり、昌一郎とともに私立中学郁文館を経て、十月には私立早稲田中学校（現早稲田高等学校）三年に編入学した（昌一郎は二年）［図2］。

つまり、ここで取り上げる日記は、その数か月後の年が改まった元日から始めた日記となる。この一九〇四年は、時期は不明ながら鐵五郎が禅との関わりを持った年として重要である。昌一郎の母萬タダ（一八六四―一九四四）は、病弱な母親を持つ幼い鐵五郎ら兄弟を引き取り（その後、母親は死去）、昌一郎とともに養育した人物だが、この伯母の勧めによって鐵五郎は昌一郎とともに禅に関わることになった。タダが帰依していたのは、臨済宗円覚寺派の僧侶・釈宗活（一八七一―一九五四）で、宗活が営む日暮里村（その後、下谷区谷中天王寺町に移転）の禅道場「両忘庵」に、鐵五郎らも参禅するようになった（註2）。

この年の日記には、しかしながらそれに関わるような記述は見当たらない。その一方で、禅宗とは異なる「宗教」への関与を複数見出すことができ見過ごせない。このことについてはこれまで研究がなされておらず、この点において日記は見過ごされてきたといってよいだろう。そこから本論では、萬鐵五郎の青年期の日記を「宗教」との関わりを観点に振り返ることで、ほどなく宗活のもとで禅を学ぶことになる彼の周囲と時代相について考えてみたい。

日記より

日記帳は、警醒社書店が一九〇三年十一月に発行した『吾家之歴史　明治三十七年』で、日記の頁は、各日を「往來」「爲したる事」「得たる思想」「社會の出來事」「雑事」の欄に分けて記述するようになっている。この日記の全文は、萬鉄五郎記念美術館が発行した『画家への出発―萬鉄五郎のみづゑと二人の師―』展図録（一九九六年）にすでに掲載されているため、ここでは関係する四日間の記述に限定して掲載し、一部の文字を修正・補記した。さらに、登場する人物や事物を注記した上で、補足することにしたい。

■一月二十四日　日曜日［図3］

［往來］青木様來ル　例ノ通リ宗教的話ニ移リ遂青年男女ノ腐敗ヲ痛論ス　午後ヨリ照井菊池、瀧野トカ云フ人其他知ラヌ遠野トカノ人

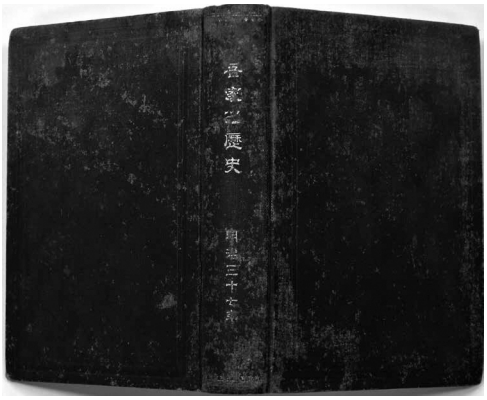

図1　「萬鉄五郎日記」冊子　1904（明治37）年　萬鉄五郎記念美術館蔵

図2　早稲田中学校の頃の萬鐵五郎（18歳）　1903（明治36）年

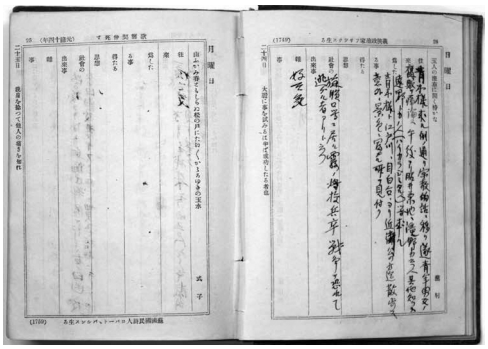

図3　右頁：1月24日（日）の日記

（ハイカラジミタル人）等來ル
［爲したる事］青木様ト江戸川、目白臺、ヨリ近衛公の方迄散歩ス　意外ニ景色ニ富メル所ヲ見付ク
［社會の出來事］旅順口等ニ居ル露ノ將校兵卒　戰爭ヲ恐れて逃グル者アリト云フ
［雜事］好天氣

【註】

［青木様］……青木重之助（一八七三―一九三七）のこと。青木は、岩手県東和賀郡中内村（現花巻市東和町）生まれ。生家は代々医業を営む。医学専門学校済生学舎で眼科を学び、日清戦争と日露戦争に軍医として従軍。その間、東京帝国大学医学部選科にも学ぶ。退役後、山形市で開業した後、帰郷し眼科診療所を開業。さらに中内村議会議員となり、地域に貢献した。なお、萬鐵五郎と昌一郎が早稲田中学校に入学した際、青木が両人の保証人であった（註3）。

【補足】

［社會の出來事］欄の記述どおり、鐵五郎は日露戦争の開戦前後の様子を日記にたびたび記している。そして、二月八日には「青木様招集サルルト云フ事ナレバ行ク　忙殺ヲ極めたる模様なり」とあり、青木重之助はまもなく軍医として出征することになる。

この日はその直前のこととして、青木が来訪し「例ノ通リ宗教的話ニ移リ」とあるように、この頃二人の間ではいつも宗教が話題にのぼっていたことがわかる。青木は、鐵五郎の一回り年長ですでに軍医の道を歩んでおり、また鐵五郎の早稲田中学入学時の保証人だったことからも頼りとする存在だったと考えられ、そこから両者の影響関係を推し量ることができる。

■一月三十一日　日曜日

［往來］青木様ノ所ニ行ク
［爲したる事］青木様　松岡君等ト成民會ニ行キ増野會長悔改と更生、江原素六氏ノ品性ノ修養其五柔和を聞ク
［雜事］夜會計の決算ヲナシ又來月の豫算ヲナス

【註】

「松岡君」……松岡忠一（一八八一―?）のこと。松岡は、岩手県花巻市生まれ。東京帝国大学農科大学を卒業し、岩手県立農学校長ほか宮崎高等農林学校長、東京高等農林学校長などを歴任した。萬鐵五郎と同じく両忘庵の門人。松岡の姉は青木重之助の妻で、青木が日露戦争に出征中、鐵五郎と昌一郎ほか数名で牛込区（現新宿区）矢来町の一軒家に同居していた（註4）。

「成民會」および「増野會長」……キリスト者で教育者の増野悦興（一八六五―一九一一）が、一九〇三年一月に「宗教道徳的修養の機関」として麹町区富士見町（現千代田区富士見。その後、牛込区東五軒町に移転）の自宅に設立したのが成民会で、毎日曜と毎月の講演会を開催した。増野は、津和野藩士の子として生まれ、同志社英学校の新島襄のもとで学び伝道活動に入る。渡米して神学校に学び、帰国後は東京や群馬の教会で牧師を務め、その後、各地の学校に赴任し教育者として尽力。最晩年はユニバーサリスト（キリスト教プロテスタントの一派）の日本同仁基督教会の牧師として活動するが、四十六歳の短い生涯を閉じた（註5）。

「江原素六氏」……江原素六（一八四二―一九二二）は江戸に生まれた幕臣で、維新後は静岡で教育に携わるとともに、政界に進出し衆議院議員、貴族院議員となる。また、東京に麻布中学校を創立し、校長を生涯務めたほか、キリスト者として東京キリスト教青年会理事長を務めるなどキリスト教界でも幅広く活躍した（註6）。

【補足】

一月二十四日から一週間後の休日、今度は鐵五郎が青木を訪問し、同じく同郷の松岡忠一らとともに成民会に日曜講演会を聴きに出かけた。この時、松岡は東大の学生だったと思われる。

増野悦興は、成民会を立ち上げる前年に瑞豊塾という家塾を自宅に開き、十名前後の学生を預かり教育にあたっていたという。学生は、東大、旧制第一高等学

校（現東京大学教養学部。以下、一高）を始めとする東京市内の大学、高等学校、中学校の在校生たちで、後に学界、教育界、官界、軍部、実業界、言論界など各界の指導的立場に立つ人ばかりであったという（註7）。この瑞豊塾を前身とする成民会の創始宣言は次のとおりだった。

『我が将来の国民たる青年諸君をして、宗教道徳的修養の機関を有せしめんが為、新たに本会を組織し、定期講演其他諸種の事業を企画して、大に尽くす所あらんと欲す、修養に志ある諸君は、来つて吾人と事を共にせよ』（明治三十六年一月）（註8）。

鐵五郎が、青木や松岡らと成民会の講演会に出かけたきっかけは不明ながら、青木をのぞく彼らはこうした学生の一人であり、また彼らの生活圏に成民会は位置していた。なお、もう一人の講演者江原素六は、増野と同様キリスト者にして麻布中学を創立した教育者であった。この二人の講演内容は、青年たちを対象とした「宗教道徳的修養」そのものだったことが題目からわかる。

■二月四日　木曜日［図4］

［爲したる事］學校カラ歸テカラ齒醫者ニ自轉車ヲ飛シテ居タ　齒ヲ一本カヽナケレバ順ヲナオサレヌゾウデ青木様ニ相談シヤウト思テ出ダソレカラ本郷ノ文明堂ニイッテ精神主義靈界ノ偉人精神講話買テ青木様（下宮比町）ニ行テ齒ノ話ヲ聞キ一本カク事ヲ極メ精神講話ヲヤッテ歸タ

［雜事］餘程暖し

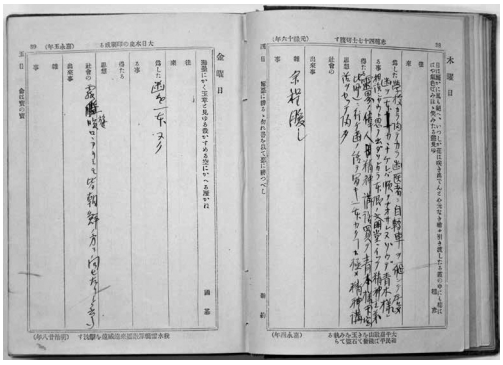

図4　右頁：2月4日（木）の日記

【註】

「本郷ノ文明堂」および「精神主義靈界ノ偉人精神講話」……浄土真宗大谷派の僧侶で宗教思想家の清沢満之（一八六三―一九〇三年）が、一九〇〇（明治三十三）年に門下の暁烏敏（一八七七―一九五四）、佐々木月樵（一八七五―一九二六）、多田鼎（一八七五―一九三七）らとともに本郷区森川町（現文京区本郷六丁目。その後、移転）の居に「浩々洞」の名を掲げて共同生活を始め、翌年ここを拠点に仏教雑誌『精神界』を発行した。浩々洞編『靈界之偉人』は一九〇一（明治三十四）年の発行（森江書店）、清沢ら四名の共著『精神主義』と清沢著『精神講話』は翌年浩々洞から出版された。萬鐵五郎がそれらを購入した本郷の文明堂はその発売所であり、また浩々洞同人の書物の出版社でもあった（註9）。

【補足】

鐵五郎が、前月下旬から歯の治療を集中的に行っている様子が日記には記されており、青木重之助にこうして治療の相談をしていた。そのためかこの時期、二人の出入りは頻繁だったようだ。そこへ清沢満之ら浩々洞同人の書物をまとめ買いした鐵五郎が、歯の相談の後、「精神講話ヲヤッテ歸タ」と記す。これがどのようなものだったかは不明だが、むろんこの日だけのことでなく以前からの行為だったと考えられる。

浩々洞が発行した機関誌『精神界』を場として社会に向けて発信された彼らの信念と主張は「精神主義」と名付けられ、毎日曜には浩々洞にて「精神講話」が開かれた。『精神界』に掲載された精神講話の広告は次のとおりだった。

毎日曜午前九時より、本郷區森川町一番地、浩々洞にて開く。
性の男女、衣服の美醜、教育の有無、そは我等の問ふ所にあらず。たゞ我等と共に道を修めむと欲する人は、誰人にても來り給ふべし（註10）。

この日曜講話会には、様々な青年たちが訪れ、内村鑑三（一八六一―一九三〇）の日曜学校の聖書研究会と並んで、東京の宗教的関心を持つ青年たちに大きな影響力を持ち、「精神主義」の名のもとに一世を風靡したとされる（註11）。鐵五郎とその周辺の青木らが精神講話に参加したかどうかは不明だが、浩々洞の書物を購入し、理解の程度は別として「精神主義」について何かしら共有していたことは明らかだ。

■二月二十日　土曜日

［爲したる事］神田青年會館ニ中學教育講話會アリ

露國勃興の話　瀬川文學博士
現代思想界の欽乏　桑木文學博士
臺灣みやげ　那賀文學博士
催眠術　實驗說明　□田隆一郎　※□は不明
戰時國際公法　中村法學博士

【註】

「神田青年會館」……イギリスの建築家ジョサイア・コンドル（一八五二―一九二〇）の設計で一八九四（明治二十七）年に神田区美土代町（現千代田区神田美土代町）に竣工した東京キリスト教青年会会館のこと。一九二三（大正十二）年の関東大震災で焼失するまでアインシュタインや内村鑑三などの数多くの講演会や集会の場となり、「神田の青年会館」として広く市民に親しまれた。この日記と同じ二月には日露戦争が開戦しており、また江原素六が東京キリスト教青年会理事長に就任してもいる。

【補足】

この時すでに日露戦争は開戦し、報道される戦況などを鐵五郎は日記に記している。この日は「神田の青年会館」へ中学教育講話会に出かけたことが演題とともに残される。中学教育の講話会ゆえ、宗教との直接的関係はないように見えるが、当時の思想界とともにその頃大流行した催眠術の実験説明が含まれているなど、いずれも宗教と接合しうる領域であり、そこから鐵五郎の関心のありかを想像することもできる。

また偶然というべきか、前月に成民会で聴講したばかりの江原素六は、この月に東京キリスト教青年会理事長に就任したのだった。中学教育講話会への参加については、江原の勧めがあったのかもしれない。

東京の青年たち

ここまで日露戦争開戦前後の約一ヶ月間の日記から、宗教を視点に四日間の記述を取り上げた。そこから見えることとして、鐵五郎とその周囲、いずれも同郷の青年たちの間には宗教が共通の話題としてあり、成民会の日曜講演会に行動をともにするほどの関心事であったことだ。そして、日記が新年当初であることから、そうした状況は前年から続くものと考えるのが妥当である。

さらに、成民会のキリスト教、および浩々洞の真宗すなわち仏教とが分け隔てなく共存するかのように、鐵五郎ら青年たちは宗教に親しんでいたように受け取れる。そうした姿は、いわゆる信仰を求める態度とは異なる〝何か〟を彼らが求めていたように思えてしまう。

既述のとおり、浩々洞の日曜講話会が内村鑑三の聖書研究会と並ぶ影響力を東京の宗教的関心を持つ青年たちに与えていたというが、まさに鐵五郎たちもその圏内にいたわけだ。そこで、同時期の東京で学生時代を過ごした人物たちの回想を見てみたい。

まず、京都学派の哲学者・田邊元（はじめ）（一八八五―一九六二）は、鐵五郎と同年生まれで、一九〇四年に一高を卒業した。

> キリスト教の内村鑑三先生とか海老名彈正先生とか、或は佛教の近角常觀先生とか、さういふ宗教的に優れた先達といふものは、その當時の一高の生徒の掲示板に毎週のやうに講演をするといふことが現はれて、私どもにとつては非常に親しいさういふ方々の名前であつたのであります。さうしてその當時の一高の最も進んだ、或は數の上からいへば少數かも知れませんが、しかし一高の思想、或は一高の校友會の論壇といふものを率ゐてゆくやうな人々は、信仰の問題、人生問題といふものを中心にして眞劍に命を賭して考へ、實際に命を賭された人もある。さういふ時代が私どもの一高の時代の現狀、事實であつた（註12）。

次に、田邊元とは一回り年少で同じく京都学派の哲学者・三木清（一八九七―一九四五）は、一九一四（大正三）年に一高に入学した。

> 高等學校時代に初めて見て特に深い感銘を受けたのは『歎異鈔』であつた。

近角常觀先生の『歎異鈔講義』も忘れられない本である。本郷森川町の求道學舎で先生から歎異鈔の講義を聽いたこともある。近角先生はその時代の一部の青年に大きな感化を與へられたやうであつた。(後略)

私のみではない、その頃の青年にはいつたいに宗教的な關心が強かつたやうである。日本の思想界が一般に内省的になりつつある時代であつた。(中略)一高にも日蓮宗とか、禪宗とか、眞宗とかの學生の會があり、私も時々出席してみたことがある(註13)。

最後に、女性解放運動家の平塚らいてう(一八八六―一九七一)は、鐵五郎とは一歳違いで同時期に両忘庵で釈宗活に参禅しており、一九〇三年に日本女子大学校(現日本女子大学)に入学した。

女子大でも、学校当局は、学生が校長の信仰以外の信仰に走ることを好みませんでしたが、クリスト教や仏教に近づく学生もおりました。寮生のなかにも教会へ出入りしている人がいて、そんなことからわたくしも誘われて、壱岐坂の本郷教会に行くようになりました。家でもお茶の水でも、クリスト教的な雰囲気とはまったく無縁でしたから、礼拝にこそ行ったことはありませんが、聖書はかなり早くからひとりで読んでいたので、誘われるまま自然な気持ちで、同時に好奇心もともなって、教会というものにも出かけたのでした。寮生のなかには、植村正久牧師の富士見教会に行く人や、真宗の新人近角常観師の「歎異抄講義」を、本郷森川町のお宅へ聴きにゆく人もいました。本郷教会には、男女の学生が多く集まりましたが、海老名弾正牧師の説教は、十分にこれらの人々にとって魅力的のようでした(註14)。

明治末から大正初めにかけての三人の学生男女の回想からは、いずれも宗教への高い関心から講演や説教への参加および書物からの感化を積極的に受け入れようとする姿が垣間見える。そこには、キリスト教の内村鑑三や海老名弾正(一八五六―一九三七)、仏教の近角常観(一八七〇―一九四一)の名が重複して登場し、ともにそれぞれ魅力的な宗教家として並列される。当時の東京の青年たちにとっては、キリスト教と仏教との差異、距離感などほとんどないもののようにも受け取れる。

煩悶する青年

生方敏郎(一八八二―一九六九)が著した『明治大正見聞史』の「明治時代の学生生活」にはこうある。「その時分の学生は、宗教問題、倫理問題に没頭していた。そんなことの嫌いな学生でもまたは宗教など柄にない人間でも、教会によく出入りした。時代精神と言おうか、とにかくその頃の流行り物だった」といい、「煩悶ということが青年学生の間に非常に流行した。皆がよく煩悶していた。神経衰弱というようなことも、学生の中にこの時分から流行り始めた」という(註15)。先の三者の回想に見たように、宗教は学生間の「流行り物」であったようだ。さらに、「煩悶」が非常に流行したという。

そこで、一九〇一年に一高に入学した岩波書店の創業者・岩波茂雄(一八八一―一九四六)の自伝を見てみよう。

人生とは何ぞや、我は何処より来りて何処へ行く、というようなことを問題とする内観的煩悶時代でもあった。立身出世、功名富貴が如き言葉は男子として口にするを恥じ、永遠の生命をつかみ人生の根本義に徹するためには死を厭わずという時代であった。現にこの年の五月二十二日には同学(一年下)の藤村操君は「巌頭之感」を残して華厳の滝に十八歳の若き命を絶っている。(中略)当時私は阿部次郎、安倍能成、藤原正三君の如き畏友と往来して(中略)常に人生問題になやんでいたところから他の者から自殺でもしかねまじく思われていた。事実藤村君は先駆者としてその華厳の最後は我々憧れの目標であった。巌頭之感は今でも忘れないが当時これを読んで涕泣したこと幾度であったか知れない(註16)。

自己の内面に閉じこもって苦悩する「煩悶」という言葉が、明治二十年代に国木田独歩(一八七一―一九〇八)や高山樗牛(一八七一―一九〇二)といった作家たちによる表現などを通して社会に広まっていったが、この言葉を真正面から受け取り熱心に煩悶したのは高等教育機関に通うことのできた一部の青年たちで、自分がどう生きたらよいのか積極的に悩み、苦しみ、煩悶したという(註17)。

そうした「煩悶青年」の象徴が、一九〇三年に日光の華厳の滝で謎めいた遺書「巌頭之感」を残し投身自殺した一高の学生・藤村操(一八八六―一九〇三)であった。この事件は、岩波茂雄をはじめとする一高生はもとより、社会にも大き

な波紋を投じた。藤村の死は新聞の一面を飾り、やがて詩歌や小説の題材にもなる。出版された遺書はベストセラーとなり、さらに藤村を模倣した後追い自殺が相次いだため、警察当局は『巌頭之感』を発禁処分とした(註18)。このように「煩悶青年」は社会から大きく注目されることになったのだ。

奇しくも両忘庵で年に一度の釈尊降誕会での余興として、鐵五郎がこの藤村操を演じたというが、それはまさにこうした世相を反映していた。

その頃、學生達の頭脳にあつた、人生を不可解とした藤村操のあの世の裁判をやつて居る事になつた。(中略)多分萬君その人は、巌頭から死を急いだ藤村操に扮し、私は藤村操の辯護士として、人生と宗教をとく役であつたらうと記憶する。筋書通りやつたに違ひないが、内容はともかく趣向は宗教を説明としたもので、青鬼赤鬼の顔や、魔大王の顔の色どりは萬君がやつたこと、思ふ(註19)。

三木清が一高生だった時に近角常観の講義を聴いたことのように、近角のもとには一高生や東大生を始めとした多くの煩悶青年が集ったとされる。碧海寿広氏は、「彼らにとって宗教とは、一方では、田舎の人間が妄信する旧態依然とした風習であった。だが他方では、自分たちのような都会の学生の趣味を満足させてくれる、新しい文化でもあった。当時の学生たちにとって宗教は、両義的な意味を持っていたのである」という。さらに、「宗教を新しい文化として受け入れ始めた東京の学生たちの、その生活圏では、近角だけでなく、他にも多彩な宗教家たちが活躍していた」として、浩々洞の清沢満之と暁烏敏を筆頭とする弟子たちや、旧来的な宗派や寺院の仏教を批判した新仏教徒同志会の人々、キリスト教界では内村鑑三や海老名弾正らを例にあげる。また明確な宗教運動でなく近似した活動として「岡田式静座法」で知られる岡田虎二郎(一八七二―一九二〇)などを、さらに東大の宗教学講座の初代教授・姉崎正治(一八七三―一九四九)を顕著な宗教性を有する人物としてあげる。「このように、明治後期から大正期頃の東京においては、宗教家やそれに類似した人物たちによる活動がきわめて盛んであり、そこに数多くの学生や若い知識人が集うという状況があった」と述べている(註20)。

花巻と東京

鐵五郎が日記を記した同じ一九〇四年の七月二十七日付『岩手毎日新聞』には、次のような広告がある(註21)。

第六回夏期講話會
講師　文學士　近角常觀師
　　釋宗演師法嗣　釋　宗活師
會期會場　自八月五日至十四日
　　於　大澤温泉場
宿泊料一日貳拾錢婦人には特別の設備あり
聽講料貳拾錢來會者は至急左に申込るべし
花卷町
講話會幹事　林　正因

このように岩手県花巻郊外の大沢温泉で開かれた夏期仏教講話会に、真宗の近角常観と臨済宗の釈宗活が講師として招かれた。その他『岩手日報』にはこの講話会に参加した人物の手記が掲載されており、その様子が窺われる。それによれば、近角は『歎異鈔』を講じ、宗活は『毒語心経』を提唱したようで、聴講者は一時六十名ほどに達し、女学生も十数名いたとされる(註22)。

この大沢温泉での夏期(夏季とも)講習(講話とも)会は、花巻の知識人や学生が中心となり一八九九(明治三十二)年に始まったと考えられ、仏教研鑽と精神修養を目的に毎夏恒例となった勉強合宿で、講師として多くの真宗関係者が招かれたという(註23)。例として、一九〇六(明治三十九)年には浩々洞の暁烏敏が、翌年には同じく浩々洞の多田鼎が講師に招かれていた。

一九〇四年に近角常観が招かれたことについては、本郷の近角の説教所である求道会館に隣接する求道学舎という学生寮に寄宿する花巻周辺出身の東大生らが手引きとなり、詩人で童話作家の宮沢賢治(一八九六―一九三三)の父・政次郎(一八七四―一九五七)らが招聘の窓口になったようだ。そして、この講習会を契機に、政次郎は近角に接近していくことになる。一年後には、妻とその父・善治および兄弟ら六人で求道学舎を訪れ、日曜講話とその後の信仰談話会に参加したとあり、その後も親族ぐるみで付き合いが続いた。また、この時同行した

善治の三男・磯吉は、求道学舎に寄宿し慶應義塾の普通部に通学してもいる。一方、近角も一九〇八（明治四十一）年と一九一六（大正五）年に花巻を訪れ布教を行っていたと考えられる(註24)。

さらに、一九〇六年の仏教講習会についても同様な形で宮沢政次郎らが中心となり暁烏敏を招いたようだ(註25)。講習会にはまもなく十歳を迎えようとする宮沢賢治が、暁烏の侍童として側にいた。賢治の弟・清六は、「毎年大沢温泉で開かれた講習会に、父に伴われた賢治は幼い割合に熱心に聞き、殊に講師のうち暁烏敏師のそばにいて離れなかったと言われている」(註26)と記す。この夏、暁烏は大沢温泉での講習会を含む約一ヶ月間の岩手仏教講話の旅を続け、これを機に政次郎をはじめとする宮沢一族との長い交流が続くことになる。

そして、この旅の中で、政次郎とは真宗の篤信者同士で親交を結んだ高橋勘太郎が仲介する形で、小田島弧舟（本名理平治。一八八四―一九五五）が暁烏と知り合うことになる。「岩手歌壇の父」と称される弧舟は、一時期、萬鐵五郎と小学校で机を並べた人物で、当初画家を志すも鐵五郎の絵を見て及ばないことを知り断念。その後、二人は歌人と画家という歩む道は異なるものの交流を続けた。弧舟は鐵五郎の画会を何度か支援し、鐵五郎は弧舟の歌集や文芸誌の表紙絵・挿絵を描くなどしている。

両忘庵の門人だった盛岡出身の堀内正己が著した小田島弧舟の伝記『曠野をゆく』には、盛岡の師範学校に進学した弧舟を早稲田中学を卒業した鐵五郎が訪ねる場面がある。

「その後、どうした？」

と、弧舟が訊いた。

「早稲田中学にはいって、かたわら菊坂町の長原孝太郎さんの研究所に通っていたんだ。それから日暮里の宗活禅師の両忘庵で禅をやったよ」

「ずいぶん、急がしいな。禅をやるわけは？」

「精神修養だよ」

「ウン」

「こんど早稲田高等学院に入ったよ」

「何を習うんだ？」

「主として語学だよ。早稲田大学の予科なんだ」

「ウン」

「こんど、おれは、老師についてアメリカにいくんだ」

「その和尚さんは、アメリカで布教するのか」

「禅をひろげるんだ。数人の弟子をつれてゆくが、おれもその一人だ」

「たまげたな」

「おれは、禅をやりながら絵を習うんだ」

鉄五郎は元気だった。弧舟は、鉄五郎を駅まで送った。鉄五郎は土沢まで来たのだが、わざわざ盛岡まで足を伸ばして、弧舟に別れを告げたのである(註27)。

この後まもなく弧舟も師範学校を卒業し、岩手県北部の浄法寺尋常高等小学校に教師として赴任するのだが、その夏に暁烏敏と出会い、大沢温泉の仏教講習会にも参加したのだった。そして、暁烏を師として親鸞の教えに通じていくようになり、その後の思想や歌作にも大きな影響を受けて、両者は互いに来訪し合うなど生涯にわたって交友したという(註28)。

以上のように、近角常観や暁烏敏、釈宗活といった東京の宗教者が、花巻の知識人や学生たちによって招かれ布教する様子の一端を見た。ここでは彼らの間で取り交わされた書簡について触れる余裕はないが、人の往来だけ見てもわかるように、それは決して一方向的なものでなく双方向であり、中央と地方との地理的距離を感じさせないほどの、宗教を通じた濃密な交流だったといえよう。

おわりに

明治三十年代後半の東京に出て中学時代を送った萬鐵五郎とその周囲を、わずかに残された日記の記述をもとにたどった。むろんそれらは生活の様子の一部に過ぎないが、上京して一年に満たない中で、彼の周囲にいわば乱立する「宗教」に関心を持ち、あれこれと手を出す青年の姿をそこから想像することができた。そうした姿は、同時期の東京の学生たちの様子からもわかるように、彼一人に限られたものでなく、「時代精神と言おうか、とにかくその頃の流行り物だった」（生方敏郎）のであり、華厳の滝から身を投げた一高生の藤村操を象徴とする「内観的煩悶時代」（岩波茂雄）に生きた青年たちの一大関心事だったと受け止めるべきであろう。そして宗教もまた、そうした社会からの要請に応えるべく、さらに維新後の大きな社会変革の中で近代化を余儀なくされ、それ

ぞれの宗派・立場の存立をかけて一層個性的な宗教家や思想家が相次いで台頭したのだった。

そうした状況は帝都東京に限られたことでなく、花巻という地方都市に限ってみても、宗教を受容する側と供給する側とが、複雑に人脈を築きながら地理的距離を越えるかのような相互交流を図っていたことを先に見た。やがて鐵五郎が参禅することになる釈宗活にしても、地方を布教して巡り、岩手、福島、山形、茨城などにも両忘会という坐禅修行会を設立して信徒を広げていった。そして、両忘庵には「人生問題に悩む多くの学生が――主に帝大生でした――集まり、坐禅をしていましたが、だれもみな一様に、極度に緊張した硬い顔の人ばかりで、きびしいものが身に迫るのを覚えました」(註29)と平塚らいてうが記しているように、東大をはじめとする多くの学生たちが集ったとされる。

このように、東京にせよ花巻にせよ、鐵五郎の周囲にはいずれも宗教を受け入れる環境が存在し、彼に近しい人々もまた宗教に感化されて相互につながっていたことになる。だから、日記のように鐵五郎が宗教に近づいたこと、さらに比較的短期間とはいえ禅に打ち込んだことは何ら不思議なことではなかったともいえる。

日記には、従兄弟の昌一郎と何度か写生に出かける記述は見られるものの、宗教に関わる記述はなく行動をともにしていない。よって、この頃にはすでに昌一郎が先に両忘庵に出入りしていた可能性も考えられる。鐵五郎は、少なくとも二月頃まではキリスト教にも真宗にも関心を持ち自ら接触していたから、おそらくその後、両忘庵に足を踏み入れたのであろう。この日記は、宗教に熱を上げる萬鐵五郎の、いわば参禅の前夜の様子を断片的ながら私たちに教えてくれるのだ。

(新潟県立万代島美術館　専門学芸員)

註1　日記の掲載図版は同館から提供していただいた。
註2　萬鐵五郎『鉄人画論』中央公論美術出版、一九六八年、三五三頁。
註3　『東和町先人顕彰誌　清流猿ヶ石』(東和町先人顕彰事業推進委員会、二〇〇六年、四五―五六頁)、『明治大正昭和日本徳行録』下巻(読売新聞社、一九二九年、一四八九頁)を参照した。
註4　『新撰大人名辞典　第七巻』(平凡社、一九三八年、四八三―四八四頁)、『絵画の大地を揺り動かした画家　萬鐵五郎展』図録(朝日新聞社、一九九七年、二〇五頁)などを参照した。
註5　滝澤民夫『増野悦興研究――埋もれたキリスト者の生涯と思想』(六花出版、二〇一九年)を参照した。
註6　加藤史朗『江原素六の生涯』麻布文庫一(麻布中学校・麻布高等学校、二〇〇三年)を参照した。
註7　前掲註5、三五六頁。
註8　「主張：発行の辞　宗教と道徳との関係」『成民』第一号、一九〇七年九月二十五日(同前、四三一頁)。
註9　清沢満之はじめ浩々洞の同人については、安富信哉編・山本伸裕校注『清沢満之集』(岩波文庫、二〇一二年)、山本伸裕・碧海寿宏編『清沢満之と近代日本』(法藏館、二〇一六年)などを参照した。
註10　『精神界』第十一号、一九〇一年十一月。
註11　安富信哉「解説」仏教的伝統の回復」(前掲註9、『清沢満之集』、三〇二頁)。
註12　田邊元『田邊元全集』第八巻、筑摩書房、一九六四年、二七六頁。
註13　三木清「讀書遍歴」『三木清全集』第一巻、岩波書店、一九六六年、三八三―三八四頁。
註14　平塚らいてう『平塚らいてう自伝　元始、女性は太陽であった』上巻、大月書店、一九七一年、一五八頁。
註15　生方敏郎『明治大正見聞史』中公文庫、一九七八年、一〇一―一〇三頁。
註16　安倍能成『岩波茂雄伝』岩波文庫、二〇二三年、八九―九〇頁。
註17　碧海寿広『入門　近代仏教思想』ちくま新書、二〇一六年、一六〇頁。
註18　E.H.キンモンス著、広田照幸ほか訳『立身出世の社会史――サムライからサラリーマンへ』玉川大学出版部、一九九五年、一九〇―一九一頁。
註19　田子一民「禪堂の故萬君」『アトリエ』第四巻第六号、一九二七年七月。
註20　前掲註17、一六四―一六六頁。
註21　栗原敦『宮沢賢治――透明な軌道の上から』(新宿書房、一九九二年、二九頁)を参照した。
註22　津川生「大澤温泉より」八月十三日付、同「大澤温泉雑感」八月十四日付、同「同(二)」八月十七日付。
註23　岩田文昭『近代仏教と青年――近角常観とその時代』岩波書店、二〇一四年、一八五頁。あわせて前掲註21も参照した。
註24　同前、一八五―一九二頁。
註25　前掲註21、一二―一三頁。
註26　宮沢清六「兄賢治の生涯」『兄のトランク』ちくま文庫、一九九一年、二四二頁。
註27　堀内正己『曠野をゆく――小田島弧舟伝』国書刊行会、一九七三年、二五―二六頁。
註28　『歌人　小田島弧舟展〈萬鉄五郎と追憶の人々〉』萬鉄五郎記念美術館、二〇二二年。五〇、五四頁。
註29　前掲註14、一七二頁。